

多胎育児家庭へのアウトリーチ型サポートの心理的効果の実証的研究

児童虐待の予防に向けた次世代型親子保健対策への新たな取り組み

大木秀一¹⁾、志村 恵²⁾、飯田芳枝³⁾、橘 薫⁴⁾、河原廣子⁵⁾、玄田朋恵⁶⁾、山岸和美⁷⁾

1) 石川県立看護大学、2) 金沢大学、3) 石川県健康福祉部、4) 多胎児サークル風っ子 KIDS、
5) 多胎児サークルてんぽなキッズ、6) 多胎児サークルピーナッツキッズクラブ、7) 多胎児サークルほっとらんど

<要 旨>

全県的な多胎育児支援組織（いしかわ多胎ネット）のもとで、一定のトレーニングを受けた多胎育児経験者（ピアサポーター）による多胎育児家庭への妊娠期からのアウトリーチ型ピアサポート活動を組織的に実施した。精神的なサポートを希望する当事者に対する個別支援や早期介入による心理的効果の評価した。ピアサポーターとコーディネーターが申込者の家庭に訪問し、当事者の訴えを傾聴し、寄り添い、必要な支援や情報を提供した。ピアサポート活動の効果を評価するために、報告カードの検討、サポート申込者およびピアサポーターへの質問紙調査、事例検討会などを実施した。主な結果は以下の通りである。1) 困難感や孤独感の強い時期には、専門的な支援だけでなく、ピアサポーターからの支援も有効である。2) サポートを受けた側だけでなく、サポートを提供する側もエンパワメントされる。3) ピアサポート活動を通じて組織自体も成長を遂げる。4) サポートを受けた側が将来的にサポートする側にまわる循環型支援につながる。5) 多胎育児支援では妊娠期からの早期介入が有効である。6) 行政、医療機関との連携は不可欠である。以上は、当事者、研究者、行政・医療専門職などが協働し、当事者を中心とした組織的な支援活動を展開し、科学的な評価を行う地域参加型研究という枠組みでのピアサポート活動が、今後の親子保健対策に有効であることを示唆する。

<キーワード>

多胎育児支援、ピアサポート活動、アウトリーチ型サポート、エンパワメント、
地域参加型研究（Community-Based Participatory Research : CBPR）

【はじめに】

図1に示す通り、少子高齢化が加速する一方で、不妊治療の一般的な普及に伴い多胎育児家庭は急増している。現在、毎年およそ妊婦100人に1人が多胎出産をしている（大木，2008c）。ART（Assisted reproductive technology: 生殖補助医療）における近年の単一胚移植の方針により、多胎出生割合は、最近3年間（2006-2008年）はやや減少傾向にあるものの、育児支援を必要

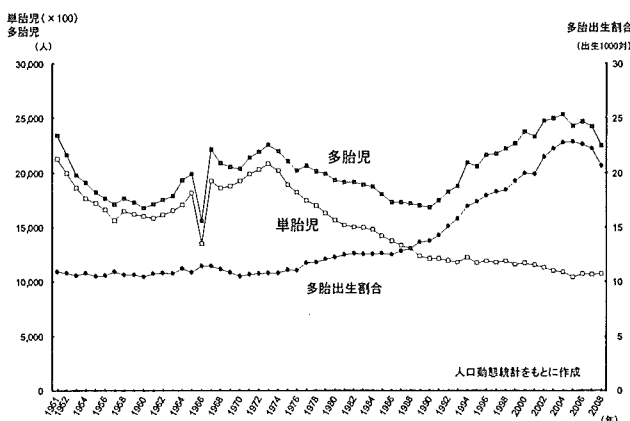


図1 単胎児と多胎児の出生数と多胎出生割合の推移

としている家庭が多いことには変わりがない。

図2に示す通り、一度に複数の児を産み育てる多胎育児家庭には、身体的・精神的・社会経済的に過度の負担が集中する。育児不安・育児困難・産後うつ・小児虐待などのリスクが単胎育児家庭よりもはるかに高く、育児破綻や家庭破綻につながりやすい (Denton, 2005; Bryan, 2006; 大木, 2008a, 2008c)。多胎に関する妊娠・出産・育児を通じたサポート・情報は不足している。図3に示す通り、従来型の個別支援や母親の参加を待つだけの育児教室ではなく、地域包括的なポピュレーションアプローチが有効である (大木, 2008b)。

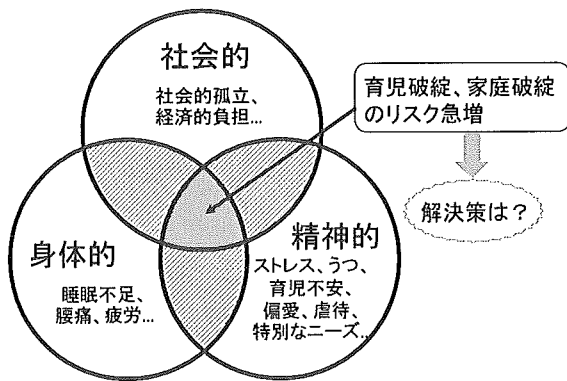


図2 多胎育児家庭をめぐる複合的な負担の重積

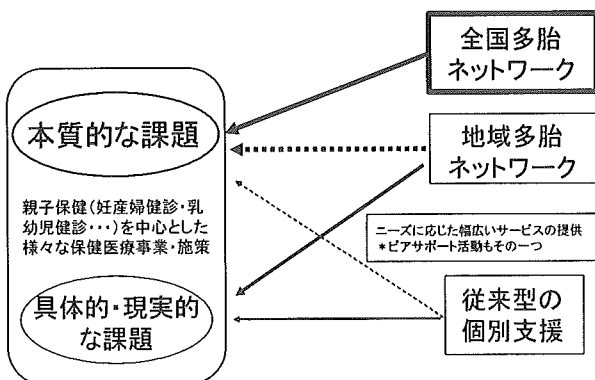


図3 地域多胎ネットの構築と多胎育児支援の新たな方向性

多胎育児に伴う公衆衛生学的な課題は様々であるが、メンタルサポートはその中でも重要なテーマの一つである。

以上の背景のもと、石川県では2005年7月に県内の多胎児サークルを中心として、多胎育児支援に関わる関係者をつなぐ全県的なネットワークである「いしかわ多胎ネット」を設立した (大木他, 2009)。多胎育児支援のための全県的規模の組織としては全国初のものとなる。いしかわ多胎ネットでは多胎育児家庭の育児負担を直接的・間接的に軽減させるために、(1)研修会や講演会の開催、(2)施策などの検討、(3)調査や研究、(4)情報の提供 (ホームページ、リーフレット、ニュースレターなど) および意見の交換、(5)ピアサポート活動などを展開している。全県的なネットワークの構築による様々な効果が既に表れている (大木他, 2009) (図4)。

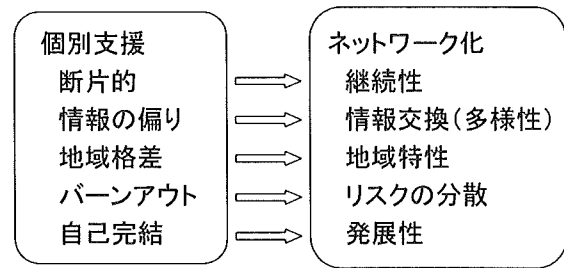


図4 いしかわ多胎ネット構築による効果

そして、地域多胎ネットワーク (サポートネットワークシステム) という考えのもと、その効果について理論と実践を通じて検討を重ねてきた (大木他, 2010)。

多胎育児家庭では、特に物理的 (手段的) なサポートと同時に精神面での (情緒的・評価的) サポートが単胎育児家庭にも増して求められている。なぜならば、多胎育児家庭の場合、不妊治療・妊娠期から育児期を通じて精神的に負担の大きな意思決定や困難への対処をしなければならない状況が、単胎育児家庭に比較して多いからである (Bryan, 2006)。しかし、特に妊娠期では精神的なケアよりも臨床医学的な事項が

担、②専門家による基本知識・社会資源・傾聴に関する一定レベルの研修の実施、③いしかわ多胎ネット（多職種との協働・連携）による困難事例や緊急時の対応、④報告カードを元にした、コーディネーター会議、事後報告会・事例検討会の実施、である（大木他，2009）

多胎育児に伴う精神的課題を抽出するために、今までのピアサポート事例を検討した。ピアサポート活動が多胎育児当事者およびピアサポーター自身に与える効果を知るために、ピアサポートを受けた当事者とサポーターに対して無記名で質問紙調査を行った。ピアサポートを受けた当事者には、ピアサポート終了後に質問紙と返信用封筒を渡した。ピアサポーターに対しては、実際に訪問に参加した人、しなかった人を含めて研修受講者（登録者）全員に無記名で質問紙調査を行った。事例検討会の場では、行政・医療の専門職から意見を収集した。

【結果】

2008年度および2009年度の訪問実績は、57家庭に102回であった。概要を表1にまとめた。

ピアサポート活動を知った経緯は、複数回答で行政18件(32%)、多胎児サークル12件(21%)、医療機関10件(18%)、民間の子育て支援団体7件(12%)などが多かった。サポートを受けたのは全員妊婦ないし母親であった。初回訪問時の多胎児の年齢は、妊娠中が14名(25%)、0～3ヶ月が約18名(32%)、4ヶ月～1歳が未満8名(14%)、1歳代が9名(16%)、2歳代が4名(7%)、3歳以上が3名(5%)であった（不明1名）。妊娠中から生後にかけて訪問した3名を含む多胎児の性の組み合わせでは、男男が13組(28%)、女女が10組(22%)、異性が20組(43%)、三つ子が3組(7%)で

あった。初産婦は36名(63%)であった（不明2名）。訪問回数は1回が32件(56%)、2回が12件(21%)、3回以上が13件(23%)であった。居住地としては、金沢市が30名(53%)、加賀地区17名(30%)、能登地区7名(12%)、県外3名(5%)であった。なお、石川県は保健行政的には、中核市である金沢市と南部の加賀地区、北部の能登地区に大別できる。能登地区では過疎化・少子高齢化が著しい。

訪問型サポートの具体的な相談内容として妊娠中では、①妊娠中の過ごし方に関する不安、②多胎出産に向けて準備するものの相談、③多胎育児に関する情報がなく不安、などに集約できた。生後3ヶ月まででは、母乳や授乳の悩み、多胎育児に伴う睡眠不足や思うように外出できないストレスなどの訴えが多く聞かれた。

2009年度は訪問型だけではなく、子育て広場・サークルに来ている多胎児の親に対してのピアサポート活動も行った。9月から開始し、翌3月までの7ヶ月で、102名への活動を行った。

子育て広場での対象者は、学童期以降の多胎児をもつ親が多かった。相談内容としては、育児面より発達に関することが多く、①性格の違い（けんか、対立など）、②学校生活について（クラス分けや進路など）、③病気、障がいについて、④家庭の人間関係の不満、などであった。

ピアサポートを受けた20名からの質問紙調査の回答結果を表2にまとめた。

サポートを受けた当事者の感想をまとめると、①気分転換できた、②多胎育児経験者から話を聞けて良かった、③情報提供が有益であった、④孤独感、不安感が少なくなった、などであった。「いずれは次に双子を出産された方の助けになりたい」との感想もあった。

表1 報告カードの概要

番号	訪問時の 多胎児の 月齢	性別	初経 産	訪問 回数	主訴
1	3歳0ヶ月	女女	初	2	現状に合う育児について話がききたい
2	0歳4ヶ月	男女	初	1	育児のストレス
3	1歳6ヶ月	男女		1	生活習慣などについて
4	1歳3ヶ月	男男	初	3	双子の下に産まれた場合について
5	2歳1ヶ月	男男	初	4	子供達の人見知りが激しい
6	妊娠28週 生後0ヶ月	女女	経	3	上の子の赤ちゃん返りなど
7	(不明)	男男		1	双子の育児について
8	2歳9ヶ月	女男	初	1	下の子がいる場合の双子との関わり方
9	0歳1ヶ月	男男	初	1	再婚のため前の子が心配
10	妊娠6ヶ月	—	初	2	双子についての知識・情報がない
11	0歳1ヶ月	男男	経	3	子供4人を1人で見るのは大変
12	1歳8ヶ月	女女	初	3	双子の人見知りについて
13	妊娠33週	—	経	1	リサイクル品について
14	0歳0ヶ月	女女	初	1	双子育児について
15	0歳4ヶ月	女男	初	1	双子育児について
16	1歳10ヶ月	男女	初	2	育児のストレス
17	妊娠34週	—	経	2	双子育児に関する情報
18	0歳3ヶ月	男女	経	4	育児支援について
19	0歳9ヶ月	男男	経	1	家の中の危険物対策など
20	1歳8ヶ月	男男	経	2	双子育児について
21	1歳1ヶ月	男男	経	1	双子育児について
22	0歳11ヶ月	男女	初	2	育児と家事の両立が不安
23	1歳4ヶ月	男女女	経	3	三つ子の育児について
24	妊娠29週	—	経	2	双子の育児について
25	0歳1ヶ月	男男	経	3	双子の上の子の対応について
26	0歳3ヶ月	女女	経	1	双子の上の子の対応について
27	妊娠22週	—	初	1	体重増加と出産準備について
28	2歳11ヶ月	男男	経	1	入園、クラス分けについて
29	0歳2ヶ月	男女	初	1	双子の育児について
30	0歳4ヶ月	男男	初	1	大人と話がしたい
31	0歳2ヶ月	男女	初	1	母乳育児について
32	0歳2ヶ月	男女	経	8	育児ストレス
33	妊娠28週	—	初	1	出産準備について
34	妊娠29週 生後1ヶ月	男女	初	2	出産準備について 育児について
35	0歳4ヶ月	女女	経	1	障がいについて
36	0歳2ヶ月	男男	初	1	双子の育児について
37	1歳1ヶ月	女男	初	1	話し相手が欲しい
38	1歳7ヶ月	女女	初	2	子育て支援について
39	0歳0ヶ月	女男	初	2	双子の育児について
40	0歳1ヶ月	女男	経	3	母乳育児について
41	妊娠30週	—	初	2	出産について
42	妊娠21週	—	初	1	出産準備について
43	0歳2ヶ月	男女	初	3	双子の育児について
44	妊娠30数週 生後0ヶ月	男男男	経	3	三つ子の育児について
45	3歳2ヶ月	男女	初	1	育児ストレス
46	2歳0ヶ月	男女	初	1	育児相談
47	0歳2ヶ月	男女	初	3	転勤先の育児情報
48	0歳2ヶ月	男女	初	1	双子の育児について
49	0歳1ヶ月	女女	経	2	双子の育児について
50	0歳5ヶ月	女女	初	1	双子の育児について
51	0歳6ヶ月	男男	初	1	体験談を聞きたい
52	0歳2ヶ月	女女	初	1	育児と家事の両立が不安
53	妊娠27週	—	初	1	多胎妊娠について
54	12歳11ヶ月	男女女	初	1	三つ子の育児について
55	妊娠5ヶ月	—	初	1	多胎妊娠について
56	妊娠27週	—	経	1	上の子の接し方
57	0歳1ヶ月	男女	初	1	母乳育児について

表2 ピアサポートを受けた利用者の回答

Q1 どのようにしてこのピアサポート活動を知りましたか？（複数回答）	
①保健センターや行政窓口からの案内	9名
②医療機関から	4名
③多胎児サークルのメンバーから	6名
④一般の子育て支援団体から	1名
⑤マスコミや広報から	1名
⑥その他	4名
Q2 ピアサポートを受けるまでの手順は？	
①スムーズに手続きできた	9名
②まあまあスムーズだった	8名
③あまりスムーズではなかった	2名
無回答	1名
Q3 コーディネーターの印象は？	
①良かった	15名
②まあまあ良かった	3名
無回答	2名
Q4 ピアサポーターの印象は？	
①良かった	16名
②まあまあ良かった	3名
無回答	1名
Q5 今後もこのような機会があれば利用したいと思いますか？	
①ぜひ利用したい	17名
②まあ利用したい	2名
無回答	1名

表3 ピアサポーターの回答・感想

Q1 これからもピアサポート活動を続けたいと思いますか？	
①続けたいと思う	14名
②状況によっては続けても良い	7名
③続けたいとは思わない	1名
無回答（活動をしなかった人）	4名
Q1-1 続けたいと思う理由	
・少しでも多くのお母さんたちの支えになりたい。	
・友達を作って精神的に救われたら良いと思う。	
・困っている方の育児が少しでも楽になればと思う。	
・自分自身も先輩ママに助言を頂き育児ができたので自分もサポートする側になりたい。	
・自分の経験談が参考になれば良いと思う。	
・相談者が元気になれば自分も元気になる。	
・出会いを大切にしたい。	

Q1-2 状況によっては続けても良いと思う理由

- ・仕事をしているので日程的に難しい。状況に応じて行いたい。
- ・自分の子育てで時間制限があるので、時間の範囲内であればお役に立つよう努力したい。
- ・自分の経験した範囲でならやってみよう。あまり問題が大きいと負担に感じてしまう。
- ・まだまだ傾聴に慣れていない。
- ・ピアサポート講習だけでは不安だ。サポーターとして成長できる場を作ってもらえれば続けたい。
- ・報告書を書くのが大変だ。

Q1-3 続けたいとは思わない理由

- ・自分の性格がサポーターに向いていないと思う。

Q2 ピアサポート活動をして良かったと感じること

- ・自分の経験が役立つという充実感。
- ・支えになれた喜び。
- ・相手が元気になる笑顔を見せてくれたこと。
- ・感謝されたり喜んでもらえる嬉しい。
- ・繋がりができること。
- ・情報を提供できたこと。
- ・双子の可愛さを改めて実感できたこと。
- ・子育ての振り返りができ、子どもたちに優しくなれる。
- ・子育てを思い出し乗り越えた自分を褒められた。
- ・人の話を聞いたり、講習を受けたりと様々な勉強ができた。
- ・色々な人に会い、世界が広がった様に感じる。
- ・自分自身の当身を振り返り、お世話になった方へのありがたさを実感した。
- ・新しい発見ができた。

Q3 ピアサポート活動をして、困ったこと・課題に残ったこと

- ・石川県以外の地域の子育て支援（サポート）について聞かれたこと（里帰り中の方）。
- ・県内でも地域によって受けられるサービスが違い詳しい情報を提示できなかった。
- ・未体験の相談を受けた時の返答。
- ・メンタル面をピアサポートする時の対応が難しい。
- ・つきそい（病院・保育園の送迎）をして欲しいと頼まれた。
- ・訪問料金の問い合わせに相手に納得できる対応ができなかった。
- ・駐車場所がない場合。
- ・仕事が忙しくなかなか時間が取れなかった。
- ・なかなかコミュニケーションがとれない場合。
- ・ピアサポート活動の内容を間違っ把握したり、違う活動と誤解して申し込みをしている人がいるので、説明をしっかりとする必要がある。
- ・最近の社会支援（新しい情報）をもっと勉強していきたい。
- ・お母さんだけでなくお父さんにも必要かなと思う時がある。

ピアサポーターへの質問紙調査では、2008年度は13名、2009年度も13名からの回答を得た。結果を表3にまとめた。ピアサポートの希望日や時間帯が申込者と合わないなどの理由で、必ずしもすべてのピアサポーターが活動に参加できてはいない。

2年間を通じて訪問後のピアサポーターの感想を分類すると、①相手に喜んでもらえて嬉しい、②双子を育てた体験が役に立つことの喜び、③自分の子育てを振り返ることができた、④必要な活動だと感じた、⑤人とのつながりが広がった、⑥子どもとの関係を見直した、などであった。活動に参加することで、自己肯定感・自尊感情が高まり、自信をもつことができ、ピアサポーター自身にも意味のある経験となった。

コーディネーター会議や事例検討会などを通じて、以下の課題点が挙げられた。ピアサポーター自身に関することでは、①サポート内容に対する不安、②コミュニケーションスキルに関する問題、③サポート先のフォローアップが必要、などである。組織全体に関することでは、①社会資源を含めより具体的な情報収集の必要性、②移動距離・駐車場に伴う問題、③活動資金に関する問題、④日程調整の難しさ、⑤他機関との連携体制、⑥研修プログラムの内容(特にピアサポート活動の意義の理解)、⑦スーパーバイズの充実、⑧広報戦略、⑨過疎地域への対応、⑩事務局機能の充実、⑪ピアサポーターとしての適性の見極め、⑫クレーム対応を含めたリスクマネジメント、などである。

【考察】

これまでにも、多胎育児が単胎育児よりも困難であることを示す調査結果は量的な研究とし

ても質的な研究としても多数ある。多胎の妊娠・出産・育児は情報が少ないことに加え、妊娠中から都市部での医療機関での診察、管理入院、さらには里帰り出産などで地元地域から離れる傾向にある。育児が始まると多忙な毎日と付随する睡眠不足、疲労、外出困難などから身近な社会資源でも活用し難い。多胎育児家庭が増加したとはいえ、絶対数が少ないことから出産直後の最も育児負担感が強い時期に育児経験者同士が地域の中で結びつくことが難しい。今後は具体的に育児困難を解決する活動を企画立案・実践し、科学的に評価すべき段階であろう。

いしかわ多胎ネットでは、当事者とともに具体的なニーズを把握し、それを踏まえた調査・研究を展開し、地域(当事者)にフィードバックすることを重視している。これは、米国公衆衛生領域で近年盛んとなっている地域参加型研究(Community-Based Participatory Research: CBPR)と呼ばれる研究の枠組み(Israel et al., 2005)に基づいている。今回の研究テーマとしたピアサポート活動とその評価もそうした具体的な試みの一つである。

1. 対象者の特徴

ピアサポート活動の申し込みは、生後3ヶ月までの多胎児を持つ母親からの依頼が最も多く、次いで妊娠中となっていた。

これらの時期に不安を傾聴し、必要に応じて多胎出産・育児経験者が自分の体験や具体的なアドバイスを行うことで、かなり不安感を軽減することができた。同時授乳や入浴方法、室内での危険回避の工夫などを具体的にアドバイスすることで、多胎育児に対するイメージがつかみやすくなる。リサイクル品やサークルの情報

も多くの人々が求めていた。多胎育児の場合には、経済的な負担が大きく、これは身体的・精神的な負担とは切り離せない(図2)。その意味でも、精神的・情緒的なサポートを基本としながらも、様々な社会資源や育児情報の提供が必要となる。

多胎妊娠中は不安も多いが多胎育児に対する情報は少ない。地域における医療・行政の現場で十分に対応できる機関は少なく、多胎育児経験者によるサポートに対するニーズは高い。早い時期から多胎育児のイメージをつかむこと、サークルなどを通して相談できる場所や人(相談相手)を作る必要性が感じられた。

現実的には妊娠中から多胎児サークルに所属することは少ない。また、多胎妊娠の場合には、胎内1児(以上)死亡がまれではない。欧米諸国には、死別に対するサポート体制が整っている(大木, 2008a)。しかし、国内の現状では、医療機関、当事者組織のいずれにおいてもこうした対応はほとんどできていない。

生後3ヶ月までの時期は、多胎育児の大変な毎日の中で、産後の体調不良や睡眠不足が重なり、精神的にも不安定になる可能性が高い。たとえ家族のサポートがある場合でも、お互いに育児や仕事の疲労が溜まると、家族関係という新たなストレスで悩むこともある。育児困難感や孤独感が強くなる時期であり、行政の専門的な対応を求めるといっても、誰かに話をすることで気持ちが落ち着く場合も多い。傾聴することの意義はこうした点にある。育児のために閉じこもりがちで、孤独感をかかえている場合は、ゆっくりと話を聴き、同じ仲間を紹介することで、気持ちを楽にすることができる。サポート活動の依頼は、初産婦が経産婦より多かった。しかし、たとえ経産婦であっても多胎児の

妊娠・育児は初めてである。前回の単胎妊娠・出産・育児との違いに戸惑い、不安をもつ場合も多い。また、単胎児に対する経験を基に判断し多胎児の妊娠・出産・育児を比較的簡単に考えている場合もある。多胎児の兄弟姉妹への接し方について悩んでいるケースも多い。

今回の申込者は3歳未満に集中した。これは行政・医療機関を中心とした周知方法のためかもしれないが、当事者がこの時期までで多胎育児の負担が軽減すると考えている可能性もある。しかし、多胎育児に伴う困難は学童期以降も様々な形で発生する(Denton, 2005; Bryan, 2006; 大木, 2008a)。子育て広場での相談が学童期以降にも多いことはこの点を裏付けている。

今回の申込者の中に三つ子家庭が3件みられた。同じ多胎であっても双子と三つ子では妊娠・出産・育児の状況は大きく異なる。このような場合に、三つ子ママとしてのピアサポーターがいることは大きな強みである。また、里帰り出産、障がいなど多胎出産では決してまれではないケースであっても、小規模な多胎児サークルでは対応が難しい。また過疎地からの申し込みもみられた。このような場合に、全県的なネットワークのもとでピアサポート活動を実施すること、他の関係組織と連携することで多様なニーズに応えられる可能性が拡大する。

2. ピアサポート活動によるエンパワメント

ピアサポーターは、大半がピアサポート活動への参加を肯定しており、訪問活動をしていない場合でも、ピアサポート研修会に参加して、傾聴することや支援の意味を考える契機となっていた。全体的なピアサポート活動の効果としては、個人から組織まで様々なレベルでのエン

パワメントが見られた。エンパワメントは、支援を受けた当事者に対してだけでなく、ピアサポーターやコーディネーター自身へも、さらには支援事業を展開する多胎児サークルやいしかわ多胎ネットそのものに対しても認められた。ピアサポート活動の進行は、必然的に行政・医療機関との連携を促し、多胎児サークルや地域多胎ネット自体のエンパワメント（ネットワークの促進）につながるといえる。

子育て支援が近年、指導型から支援型へと転換してきたことや、虐待の一次予防、早期発見の観点からも訪問型支援・訪問事業への関心は近年急速に高まっている。コーディネーターやピアサポーター自身が地域子育て支援の貴重な人的社会資源となる。これは地域づくりや多胎児サークルの活性化などボトムアップ型の活動として社会的意義は大きい。しかし、活動を展開するなかで、運営体制などの課題も見えてきた。こうした課題を検討し、広く親子保健福祉に貢献できる活動に発展することを期待したい。

3. 親子保健全体の中での位置づけ

今回子育て広場・サークルでのピアサポート活動を行い、訪問型サポートとの違いを確認した。多胎児の子育てという同じ経験をもつ人が集まる場所では情報提供はしやすく、親子がお互いに打ちとけられる場では、仲間づくりも容易である。悩みを吐き出せる場所や機会があることは重要なことであり、発散することで気分は楽になる。しかし、深刻な問題を抱えている人への対応は難しい。また、今回のピアサポート活動では、情緒的なサポートを念頭に置いたが、実際には物理的なサポートを期待されたり、物理的なサポートをせざるを得ない場面もある。

多胎児サークルを中心とした活動だけでは人材に限りがある。今後は、親子保健全体の中で多胎育児支援を考えるというアプローチも重要である。父親への対応も必須の課題である。

訪問型のピアサポート活動だけでなく子育て広場におけるピアサポート活動、ピアサポーターおよび相談申込者に対する質問紙調査、コーディネーター会議や事後報告会などを実施したことは、ピアサポート活動の定義やガイドラインを検討する良い機会となった。

4. 様々な関係機関との連携

行政機関・医療機関を通じてピアサポート活動を知り、申し込む場合が多かった。事例検討会への参加などを通して医療・行政職（助産師・保健師）が、ピアサポート活動の有用性を理解し、該当者へ案内している場合も多いと思われる。事例検討会に参加した保健師から、「専門職にとって多胎育児者の生の声を聞ける機会は貴重であり、勉強になる」との言葉を頂いた。

現状では専門職だけで多胎育児支援を行うことには限界があり、同じ立場のピアサポーターが関わることで、医療や行政との橋渡しが円滑に進む可能性も大きい。当事者にしかできないこと、専門職にしかできないことがある程度明解になり、お互いの強みを補完しあった支援体制が有効であると思われた（大木他，2010）。

行政機関に対しては、ピアサポート活動の予防活動としての有効性を知ってもらうことと、ピアサポート活動に対する担当者の認識の差を軽減していくことが今後の課題となる。また、困難事例の引き継ぎや適切な情報提供などの役割のほかに、行政的専門的視点から見たピアサポート活動の課題や改善点などのアドバイスを

受けていく必要もある。

医療機関は、将来の多胎育児者が最初に関わる場所である。ピアサポート活動の結果からも産科場面でのサポートの必要性は明らかである。今後は、様々な手段で活動そのものの周知と連携を構築すること自体が大きな課題である。

公衆衛生学的なポピュレーションアプローチの考え方でいえば、育児破綻を来す多胎育児家庭の総数はハイリスクな一部の家庭よりも、中程度のリスクをもった家庭の方がはるかに多いことになり、ピアサポート活動はこうした層に対する予防効果が大きい(大木, 2008a, 2008b)。

【おわりに】

これまでのピアサポート活動の経験を基に、2010年5月のいしかわ多胎ネット年次総会において「ピアってすごい」というテーマでシンポジウムを開催した。ピアサポーター・コーディネーターがシンポジストとして、ピアサポート活動について発表し、活動成果を集約した。

サポーターとして発表した人の中には、自分も辛い時期にピアサポートを受けた経験をあげ、ピアサポートの重要性や必要性を話した人もいた。ピアの助けにより、力をもらった経験が、「自分もピアサポーターになって誰かを助けたい」という思いを生みだしていた。こうした、循環する支援は、地域に根ざした多くの支援者を生み出す可能性を秘めており、社会的意義は大きい。また、ピアサポートという形だけではなく、ピアママの様々な経験や悩みを聞くことで、専門的支援だけでは得られない効果が期待できる。今後は量質ともに範囲を広げて活動を継続して行く予定であるが、その際に、平岩(2009)のいう、「「支援」よりも「理解」を」と

いう活動の原点を忘れてはいけないと思う。

【文献】

- Bryan E(ed.) (2006): Best Practice Guidelines. Early Hum Dev. 82(6), 353-403.
- Denton J (2005): Twins and more--2. Practical aspects of parenting in the early years. J Fam Health Care. 15(6), 173-176.
- 平岩幹男 (2009) : 子育て支援とは ―ピアサポートも含めて。公衆衛生, 73(5), 370-373.
- Israel BA, Eng E, Schulz AJ & Parker EA (2005): Methods in Community-based Participatory Research for Health. CA: Jossey-Bass.
- 大木秀一 (2008a) : 多胎児家庭支援の地域保健アプローチ. ビネバル出版.
- 大木秀一 (2008b) : 地域多胎ネットはなぜ有効か. 平成 19 年度独立行政法人福祉医療機構「長寿・子育て・障害者基金」助成事業 多胎育児支援地域ネットワーク構築事業第 2 年次報告書, 7-27.
- 大木秀一 (2008c) : 親子保健・学校保健(5) 多胎育児と公衆衛生学的な課題. 日本公衛誌, 55(7), 467-473.
- 大木秀一, 志村 恵, 飯田芳枝 (2009) : 石川県における多胎児家庭への支援 ―いしかわ多胎ネットの構築とピアサポート活動―. 北陸公衛誌, 35(2), 63-70.
- 大木秀一, 谷本千恵 (2010) : コミュニティにおけるセルフヘルプグループを基盤としたサポートネットワークシステム研究の今日的課題と展望. 石川看護雑誌, 7, 1-12.
- 坂本智代枝 (2007) : 精神障害者のピアサポートにおける実践課題 ―日本と欧米の文献検討を通して―. 高知女子大学紀要, 57, 67-79.